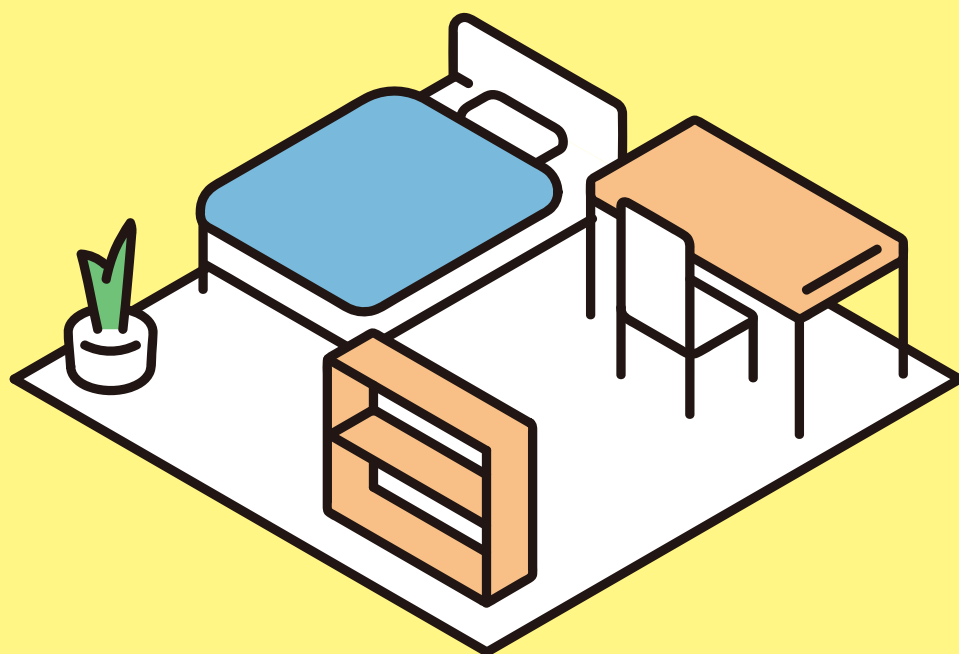


LGBT支援ハウス 2023年度 報告書



LGBTハウジングファーストを考える会・東京

代表あいさつ

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」はシェルターを開設し約5年になります。

立ち上げ当初からこれまで、たくさんの関係団体や協力者のみなさまから、ご支援を賜りました。また、多くの関係団体やみなさまから、ご寄付や助成金などを賜りながら、ここまで運営してきました。衷心より感謝申し上げます。現在はファイザー株式会社のファイザープログラムより助成金を賜り、活動の資金とさせて頂いております、この場を借りて深謝申し上げます。

20年以上前のことですが、性別違和を抱えた友人が自死しました。その知らせは私にとってショックな出来事でした。当時、私はLGBTQコミュニティ以外では全くカムアウトできず、クローゼットの状態で『いつ排除されるかわからない』という不安を抱えながら働き、鬱になって引きこもった時期もありました。LGBTQ当事者の仲間や理解ある支援者に支えられ生きてきました。

現在は、社会状況から、私自身にとって以前よりも生きやすいように感じ、カムアウトする機会も増え、排除されるという心配をしなくなりました。LGBTQの困窮者を他人事には思えない、これまでたくさん助けてもらったお返し、そんな思いで活動を続けてきました。シェルターを利用する方や相談してくる方からの話を聞いたり、関係者をよんでの勉強会に参加したりする中で色々学びました。

海外の深刻なLGBTQの現状、日本に滞在する外国人に対する差別的な対応、日本国籍の当事者だとしても周囲の無理解による差別的状況、相談することの難しさ、不安定になりがちな就労状況などなど、LGBTQ当事者といっても、抱えている問題も状況も様々だということを知り、考えさせられました。

この小冊子で利用された方々の声を直接届け、私達の思いを分かち合ってもらうこと、私達の活動がLGBTQ当事者の生きやすい社会になる一助となることを心から願っています。

LGBTハウジングファーストを考える会・東京 代表 松灘 かずみ



「LGBT ハウジングファーストを考える会・東京」のあゆみ

- 2017年 8月 中野区内の支援者を集めて情報交換
- 2018年 7月 1回目のクラウドファンディング実施
- 5月 キックオフイベント「LGBT×貧困→ハウジングファースト」開催
- 12月 支援ハウス(1室目)開室
- 2019年 1月 利用者の受入れスタート
- 5月 シンポジウム「LGBT×貧困→ハウジングファースト2019
虹色ハウスの実践報告」開催
- 2020年 5月 仕事と住まいに関する緊急アンケートを実施
- 7月 オンラインイベント「LGBT×貧困=シェルターを増設」開催
- 9月 2回目のクラウドファンディング実施
- 12月 支援ハウス(2室目)開室
- 2021年 3月 第1回全国の生活困窮者支援団体への調査
- 4月 オンラインイベント「新型コロナと貧困」開催
- 5月 JAMMINとのコラボチャッププロジェクトを実施
- 2022年 5月 オンラインイベント「LGBTと難民」開催
- 12月 第2回全国の生活困窮者支援団体への調査
- 2023年 4月 第1回LGBTQ相談・援助者交流会
(Tokyo Rainbow Week関連企画)協力
- 12月 東京近郊の福祉事務所への調査



※2019年度以前の活動については、
「LGBT支援ハウス2019年度活動報告書」も合わせてご覧ください。
<https://lgbthf.tokyo/wp-content/uploads/2020/03/lgbthf12p.pdf>



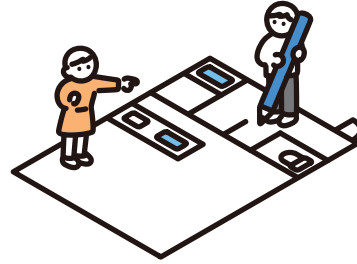
支援状況、コロナ禍を迎えて

■ 新型コロナを機にシェルターの増設へ

2020年春に新型コロナのパンデミックが始まり、私たちは「仕事と住まいについての緊急アンケート」をオンラインで実施しました。

その結果からは、飲食業やマッサージなど、非正規雇用やアルバイトで生計を立てている人たちを中心に、生活に大きな影響を受けていることがわかりました。

それを受け、シェルターの増設に向けてクラウドファンディングを行い、2020年12月末、二カ所目のシェルターを立ち上げることができました。シェルターの運営にあたっては、公的な補助を受けていないため、皆さまからいただく寄付が貴重な支えになっています。



■ 寄せられた相談の傾向

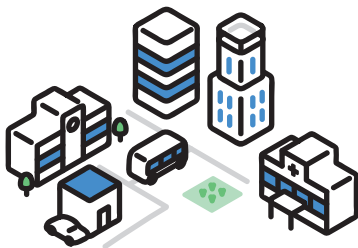
シェルターを開設してからこれまでに20名の方々が利用されています。一人一人が生活に困窮する背景にはさまざまな理由があります。LGBTであることに加えて、病気や障害がある、パートナーからDVを受けている、コロナ禍で仕事がなくなり家賃が払えなくなったなど、さまざまな理由が複雑に絡んでいる方も少なくありません。

最近では、家族からの暴力を受けているトランスジェンダーのユースや、同性愛が非合法となる国からやってきた難民の方からの相談が増えています。

また、生活に困窮したり、暴力被害を受けたときに、男性が安心して利用できる個室環境が整った施設がなかったり、トランスジェンダーの方が自分の望む性別でケアを受けにくいことも大きな課題です。難民の方の場合、生活保護制度をはじめとする社会保障制度が利用しにくいという現状もあります。



■ 地域でのネットワークづくり



シェルターが利用する方がそれぞれに抱えている課題を解決するためには、行政、医療機関、社会福祉施設など、LGBTの枠組みを越えて、地域の関係者の方々との連携が必要になります。

私たちはこの間、自治体の福祉事務所や保健所、クリニック、NPO、近隣の不動産屋などとのネットワークづくりにも力を入れてきました。LGBT当事者が、地域の一員として暮らせるための取り組みも進めていきたいと考えています。

イベント、調査、連携会議

■ オンラインイベント

当団体の活動やLGBTに関わる問題を知っていただくために、オンラインイベントを開催しました。

2021年には「LGBTハウジングファースト・オンライン報告会～新型コロナと貧困～」として、当団体の活動報告とともに、新宿二丁目で飲食店を運営されている方々をお招きしてコロナ禍についてお話をいただきました。

また、同性間の性交渉が犯罪とされる国が存在し、その中には死刑や禁固刑などの厳しい罰則を定めている国もあります。LGBTであることを理由に迫害を受け、国外に逃れた当事者の中には日本で暮らす人もいます。この現状を踏まえ、2022年には「LGBTハウジングファーストオンラインイベント～LGBTと難民～」として難民の支援をされている方々をお呼びしてお話しいただきました。

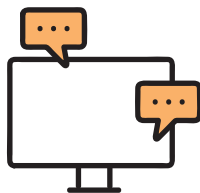


■ LGBTに関する調査

2021年・2022年には、認定NPO法人ビッグイシュー基金が発行する『路上脱出・生活SOSガイド』に掲載されている各地の生活困窮者支援団体を中心にアンケートを実施し、LGBTフレンドリーな団体の情報とあわせて冊子にまとめました。

また、2023年には「福祉事務所におけるLGBTに関する支援についてのアンケート調査」として、東京や関東地区の政令指定都市の福祉事務所にご協力いただきLGBTに対しての理解や知識などの現状をまとめました。

■ 協力団体との連携会議



活動を通して協力関係にある皆さまと一緒に、LGBTや生活困窮に関連するテーマについて学び、理解を深めるための連携会議を開催しています。

これまで「LGBTQ+の就労支援」「ITと貧困」「依存症」「犯罪被害者支援」など様々なテーマでゲストをお呼びしお話しいただきました。連携会議の中のお話から地域の団体とのつながりもうまれました。



利用者の声、メッセージ



みつるさん

自分がこちらの団体とのご縁のきっかけは、自身が刑務所を満期で出所し、区役所との生活保護申請が難航していたなか、刑務所に入る前から交流があったNPO団体の方から「今月空く部屋があるけど申請しとく?」という話をいただき、申請が通ったことでお世話になることとなりました。

住居や携帯も解約になっていた身には、居住地を与えられたことで、就寝ができる場を得られた以外にも、社会生活の中へ入り込むために現代社会で必須な携帯電話の契約にこぎ着けたことが大きく、やはり定住所を一時的

に得られたことで連絡先窓口が得られ生活保護申請や医療系の手続きも進められ、社会生活の再生を迎えられることになりました。

それからは様々な手続きや住所変更等バタバタしましたが、一段落ついたころ、ようやく落ち着いて寝起きできる生活を迎えられるようになりました。現時点はまだ未就職者ですが、活動できる住所があるのとないのでは精神的なものが大きく違い、少しずつ気持ちが安定できることでガチガチだった先のこととかが考えられる心に余裕が少しずつできて行動ができるようになりました。



Bさん

私がシェルターを利用することになったのは、自分のクィアネスをめぐって親と対立関係に至り、家にいられなくなったことからでした。シェルターでの生活が快適だったかと言われると、当時の精神的ストレスもあり難しいところでした。

初めて1人で生活しないといけないことになり、部屋に籠りがちになってしまった部分もありましたが、一方で親との関係性と疲弊した精神を立て直すための基盤として心強かったこともまた事実です。

関係する方々にも部屋に来ていただいたりして、ひとまず脅かされることなく居ること・帰ることのできる場所があるという事実を感じられるにつれ次第に精神的な回復に繋がりました。そこでの生活をもとに親との関係性の改善を得られたこと、そして親への依存を軽減して生活できたという経験によって現在の生活へと繋がっています。

今は「ハウジングファーストの会」との関わりは薄くなっていますが、これからも活動を続けられて多くの人にととの基盤となることを願っています。



テラーさん

穏やかに秋の日が過ぎてゆきます。今の家に引っ越していただいた一年たちました。シェルターからの引っ越しから一年です。

自分に合った仕事を見つけました。その仕事がとても楽しいので毎日楽しいです。

今年の夏の暑さにはまいりました。少し痩せました。仕事でよく動くのでその影響もあるかもしれません。

適応障害/鬱病と不眠症は、いまだにびたりとは治りません。悪夢をたびたび見ます。

でも、動けないくらいの落ち込みは大きく減りました。シェルターでの暮らしは、それ以前と今現在のちょうど間に有って、シェルターにいた頃に色々手続きをしたこともあって、思い出すのが少し辛いこともあります。

時間が経てばもっと穏やかに思い出せると思います。ただシェルターに住めなかったら、もっと壊滅的な境遇と環境に居ることになっていただろうと思います。



Dさん

Hi, im D, in my 40s LGBT person from Africa. I specifically came to Japan because I knew it was an LGBT friendly country. Back home it is literally a crime being an LGBT person, and you can not even think about coming out or trying to live your life normally. But when i landed in tokyo i was totally lost, because, as a refugee applicant, there are not so much solutions for subsistence, not to mention the fact that i didn't have a work permit. But the most concerning problem was shelter. Especially because of the homophobia within the

こんにちは、アフリカ出身の40代のLGBT当事者、Dです。特に日本に来たのは、日本がLGBTに優しい国だと知っていたからです。自国ではLGBTであることは文字通り犯罪であり、カミングアウトしたり、普通に生活しようと考えることさえできません。しかし、東京に降り立ったとき、私は完全に途方に暮れました。なぜなら、私が労働許可証を持っていなかったことは言うまでもなく、難民申請者として、生きていくための解決策がそれほど多くなかったからです。

しかし、最も懸念された問題はシェルターでした。特に、同性愛が禁止されている文化的背景を持つ難民コミュニティ内の同性愛嫌悪のためです。

refugees community, which are mostly from cultural backgrounds, where homosexuality is forbidden. The fact that i was able the reach out to LGBT Housing first was a live saving moment. It provided me with a safe shelter, but not only. I benefited also from continuing care, guidance and support from LGBT housing first team, that allowed me to improve my integration in society by providing tools to learn Japanese and even an opportunity to do volunteer work.

I'm deeply grateful for the help i got from LGBT Housing first, and i hope that other people, after me, can benefit from their experience, dedication and unlimited care for the LGBT cause.

最初に「LGBTハウジングファースト」に連絡することができたことは、命が救われた瞬間でした。それは私に安全な住居を提供してくれましたが、それだけではありませんでした。また、「LGBTハウジングファースト」チームからの継続的なケア、サポートにも支えられ、日本語を学ぶためのツールやボランティア活動をする機会も提供してもらい、社会参加することができました。

「LGBTハウジングファースト」から得た支援に深く感謝しています。そして、私の後に続く他の人々が、LGBTであることに対する彼らの経験、献身、そして限りないケアに支えられることを願っています。(訳:事務局)



さとふるさん

2019年秋勤めていた会社を適応障害により退職、飲食店にてバイトをしていました。

2020年4月7日コロナ緊急事態宣言により、バイトしていた店舗も閉店、自分自身に債務もあり、家賃も支払えない状況に、このまま路上生活をするのか?と考えてましたが、

一度実家に帰省、コロナ影響で再就職も困難な状態、HIV陽性の自分は拠点病院等の問題も有り、明日の状況も判らない状態で窮地に立たされていました。

そんな時にネット記事にて、LGBTハウジングファーストさんの活動を見る事が出来、連絡、面談を経てシェルターに2020年6月入居する事が出来ました。入居期間中に債務整理を行い色々人生をリセットする事が出来ました。本当に大変お世話になりありがとうございました。





支援者からのメッセージ (五十音順)

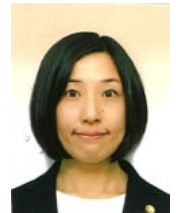
私が「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」と出会ったのは、2021年の夏のことでした。東京弁護士会で毎日実施されている、「子どもの人権110番」の電話担当の日、トランスジェンダーの方が家から飛び出したという電話を受けたことがきっかけでした。

受け入れ先がなかなか見つからない中、ここのシェルター利用を快諾して頂いたのです。未成年ということで、食事・通学・健康管理など、成人の人とはまた違う配慮が必要であり、金井さんや大江さん（そして一緒に子ども担当をした北條弁護士）にはとてもとても多くの時間を割いて頂きました。

その子もなんだかんだでいったん帰宅し、無事進路も決まりました。何度感謝の言葉を伝えても足りません。

未成年を対象とするシェルターは、利用対象者を男女どちらかとしているところも多く、トランスジェンダーではない子に比べると、利用できる施設が限られているように思います。安心して住むことのある場所があるということは、人生を再スタートさせる上でとても重要な役割を果たします。その人が次のステップに行くための、礎となるからです。

これからも、シェルターが継続していけるよう応援していきます！



弁護士
金子美晴

2019年にシェルターの稼働を開始され、同年に「草の根市民基金・ぐらん」の助成金を活動資金の一部として活用いただき、その活動も5周年を迎えられとのことで大変嬉しく思っています。

「草の根市民基金・ぐらん」は、生活クラブ・東京の組合員を中心に、市民の寄付を原資として、地域の現場で当事者の方々への支援やサービスを提供する団体、地域社会づくりを進める活動を支援してきています。また、組合員・寄付者等と助成団体との交流企画として開催しています「草の根交流・学習会」のゲストとして、金井さんにお話しいただきました。参加者の皆さんが活動を詳しく知り、その背景にある課題などについて多くのことを学ぶ機会となりました。

そのような助成事業や交流活動などから、新たな社会的な課題や政策・制度の問題点などを発見することができます。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」の皆さんの活動もその一つで、少しずつかと思いますが社会の側が変化してきていることも皆さんの活動があつてのことだと認識しています。

世界各地で紛争が起き、日々の生活に不安を抱き、様々な課題を抱えた多くの人が世界にも日本国内にも存在しています。地域での活動、市民による活動が、地域をつくり国や社会を変えることにつながると信じています。「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」の活動もその一つであることは言うまでもありません。今後も10年、20年とその活動を継続し、そのことから見える社会の課題などを発信していただければと思います。



「草の根市民基金・ぐらん」事務局
NPO法人まちぼつと理事兼事務局長
小林幸治

私が「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」を知ったのは、2019年度のパルシステム東京・市民活動助成基金の助成団体を選ぶ過程でのことでした。

当時、「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」はクラウドファンディングで資金を集め、ホームレス状態に陥ったLGBT当事者が安心して利用できる個室のシェルター（シェアハウス）を開設したばかりで、ホームページや事業報告書の作成費用、同行支援者への謝礼等を必要としていました。

この事業の背景には、ホームレス状態に陥ったLGBT当事者が簡易宿泊所等で性的被害を受けたり、戸籍上の性が男性であるトランスジェンダーの人が既存の女性用シェルターに入れない等の問題があります。

私は応募書類を読み、事業の緊急性や必要性を納得し、助成するにふさわしい活動であると推したことをよく覚えています。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」さんとの出会いは、会員の方からのご紹介でした。地域の資源を知る情報交換会（注：連携会議）のような場で私のお仕事の紹介をさせていただくお時間をいただき、そこでお話ししたフードパントリーの取り組みを聞いて、その後入居されている外国の方Xさんを紹介して下さったことが、関わりのはじめだったと思います。

私は子供のころから英語の授業が大の苦手です。ほとんど英語を話す機会がなかったので、初めて紹介していただいたXさんとお目にかかった時にはどうなることかとドキドキして、片言でぎくしゃくしてしまい今でも恥ずかしい思い出です。

NPO法人木パトと申します。「もくぱと」と読みます。

神奈川県相模原市で野宿者支援をしながら隔週木曜日にパトロールをしているので「木パト」です。野宿者が（希望するなら）アパートに入居できるよう、生活を整える期間としてシェルターを運営しています。現在では野宿者だけでなく、生活を整えたい生活困窮者や、DVから逃れるための準備をする方も多く利用しています（そのため住所は公開していません）。

DVのシェルターというと、夫のDVから逃れて共同生活をする女性たちのシェルターをイメージするかもしれませんが、木パトではアパートの個室を使っているため、同性パートナーによるDVから逃れるために利用することも可能です（共同生活をするシェルターでは、DV加害者である同性パートナーが近づけてしまう危険性がある）。

助成決定後は事務所を訪問し、助成事業の進捗状況、今後の展望についてももうかがいました。ケースワーカー、保健師、精神保健福祉士等、ボランティアで活動を支えている専門家の皆様にもお会いして、専門性に裏付けられた支援が行われていることを頼もしく感じました。

あれから5年。コロナ禍で生活や雇用の不安が膨らむ中でシェアハウスを増設したと聞きました。困難を抱えるLGBT当事者のよりどころがまだまだ必要とされている現状に心を痛めつつも、支援の輪がさらに広がりますようお願い申し上げます。

パルシステム東京
市民活動助成基金運営委員
佐藤いづみ

外国の方だけでなく、まだお会いしない方々へは「偏見はないように、差別もしたくない。」と思いながらも、縁がない生活していたことで、理解が足りないことにも気にならないで過ごしてきたのかと改めて気付かされました。

これからも何かチャンスを頂けるのであれば、ぜひいろんな事でお声かけいただけたら嬉しいです。ご活躍を陰ながら応援しています！

社会福祉法人武蔵野療園しらさぎ桜苑
地域連携室
白岩裕子



また、生活困窮者の中にはトランスジェンダーの人たちや、難民申請中の人たちもいます。LGBTであるという理由で迫害から逃れるために日本にやってくる人たちは少なくありません。日本までたどり着いて難民申請までできたはいいけど、住める場所がいっぱいでどこにも入れない、といった相談がハウジングファーストから木パトに来ることもあります。実際にこれまでも何人もの人たちがハウジングファーストを経由してシェルターを利用しました。

これからも木パトをどうぞよろしくお願い申し上げます。

NPO法人木パト理事
平良愛香



難民支援協会では、日本に逃れてきた難民への支援をおこなっています。

日本では、難民申請の結果が出るまでに平均で約4年かかる上に、難民認定が非常に厳しく、さらに難民申請の結果を待つ間、ひとりの人間として生きていかねばなりません。日本での生活も困難を極めます。

まず来日直後、言葉も通じない、家族も知り合いもない日本に逃れてきたものの、母国から持ってきたわずかなお金はすぐに尽きてしまい、寝る場所がない、食べるものがないといった状態に追い込まれます。連日、ホームレス状態に陥ってしまう新たに来日した難民からの相談が後を絶ちません。

中でも、LGBTの方々の難民が増えてきています。日本でも、2018年に初めて同性愛を理由に母国で迫害されるおそれがあると訴えた方が難民として認定されました。

世界には、LGBTであることにより死刑になったり、投獄されたり、法律により罰せられなかったとしても社会の中で暴力を受けるなど、人間として生きていけなくなる国々があります。そのような国々からLGBTの難民の方々が日本にも逃れてきており、この社会でともに生きています。

LGBTの難民でホームレス状態の方からの相談があると、いつも「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」のみなさまにご相談しています。何人かの難民の方々をみなさまのシェルターに入居させていただき、親身に接して下さることに感謝しています。

シェルターに入居した方が「夜中に目覚めたときに、自分が自国にいるような錯覚に陥ることがあったが、シェルターに入居してからは安心して眠れることができた。今、自分は安全な場所にいるのだと実感している」と話されていました。単に雨風をしのぐための場所としてではなく、安心を感じられ、安全でいられる住まいを提供いただいていることに心から感謝します。

今後とも、協働いただけると大変ありがたいです。何卒宜しくお願いします。



認定 NPO 法人難民支援協会
新島 彩子

数年前に、親から虐待を受けた10代のLGBTの逃げ場として、貴会にお世話になりました。温かく見守り、声をかけ続けてくださったこと、深く感謝申し上げます。

子どもに限らず、人は、「ここには自分を傷つける人はいない。」「ひとりぼっちじゃない。」「ここでなら一息ついていいんだ。」と思える場所で過ごして、はじめて、安心して自らの生活や将来を思い描くことができるようになります。

安心して過ごせる住まいは、人が人として生きるために不可欠の要素です。

弁護士として子どもにかかわるとき、私は何度も、己の無力さ、不甲斐なさを感じます。しかし、それでも踏ん張って、困難を抱える子ども達に伴走しようと思えるのは、ひとえに、貴会をはじめとする、安心できる居場所を提供し、見守り、声をかけてくれる心強いサポーターの存在があるからです。

貴会がますます発展し、一人でも多くの方が安心できる居場所と人とのつながりを得られるよう、心よりお祈り申し上げます。



弁護士
北條友里恵

LGBTQであることは病気・障害ではありませんが、困難やハラスメント等の経験から、うつ等の精神障害における高リスク層です(LGBTQの41%が過去10年に精神障害を経験)。この状況は、LGBTQの生活困窮(LGBTQの46%が過去10年に生活困窮を経験)、孤独・孤立(内閣府調査と比べ、10代LGBTQの孤独感は8.6倍)、自死(64%が自死念慮経験)等の高リスクに繋がっています。

一方で、「福祉サービスで支援者に性のあり方を伝えたら周囲に暴露された」「生活保護を申請するなら“贅沢品”であるホルモン投与をやめるように言われた」「男女別のシェルター施設しかなく、入居を断られた」等、安全網であるはずの行政・福祉サービスを利用する際にも、LGBTQの76%が困難やハラスメントを経験しています。

このような状況下で、特に重要なのが、まず安心して暮らせる住まいと、そこから社会資源に繋がっていくためのサポートです。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」のみなさまはまさに、日本初のLGBTQ向けのシェルターを2018年に開設され、その双方を継続的に提供されてきました。この先駆的なモデルが継続的に発展するとともに、その叡智・ノウハウが各地の福祉事業者/支援機関等へ広がることで、どの地域でも、LGBTQも安全に福祉や支援を受けられ、安心して暮らせる日本になることを願っています。



認定特定非営利活動法人 ReBit 代表理事
社会福祉士
薬師実芳

私が国際理事会の理事を務めるヒューマン・ライツ・ウォッチは世界的な人権擁護団体です。人々の暮らしを脅かすような人権侵害があった場合、私たちはそれを調査し、レポートにまとめて公表し、政府や自治体、並びに企業に対して対策を求めます。事実が持つ力はとても大きく、人の心を動かし、政策に結びつきます。日本ではトランスジェンダーの人々がおかれた状況に関して2回調査を行い、数百人の方に聞き取りをし、レポートを公表してきました。立法の場のみならず、過去の裁判で、これらのレポートが参考資料として使用されたことも事もあります。

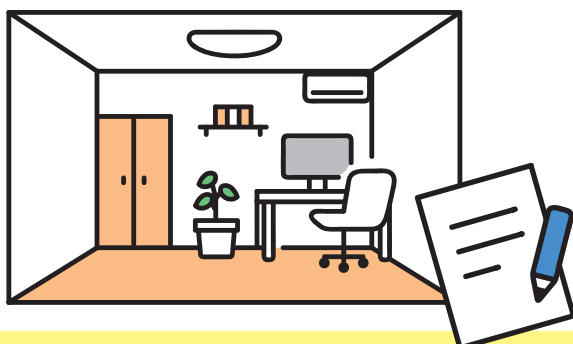
こうした調査を行う中で、多くの当事者が毎日の暮らしの中に、突然暗闇が襲ってくるような感覚を持たれていることが分かりました。

性別移行を希望しているけれど、それが職場で受け入れられなかった場合、職を失い、収入を失う事で、家賃が払えなくなるのではという不安がある。漠然とした、というにはあまりにリアリティーがありすぎる当事者の置かれた現実に、改めてショックを受けました。

プロジェクトを継続して、利用者が積み上がることは、事実として変えなくてはならない現実があるという事です。プロジェクトに関わられた皆さんに敬意を表すると共に、行政や立法がこのリアルに目を向け、共に一歩を踏んで行ってほしいと思います



ヒューマン・ライツ・ウォッチ国際理事
柳沢正和



「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」でのシェルター開設から5年とのこと、皆様の活動に心より感謝申し上げます。

私は内科医として病院に勤務しており、社会的に困難な状況の中で暮らされている患者さんと接する機会が多くあります。そのような中で、「医療」の枠組みの中で医師ができることは本当にわずかであり、生活の基盤が整っていることがいかに命に直結しているかを痛感しています。

セクシュアリティのことだけではなく、複数の要因が絡まり、社会的支援や福祉のネットワークが届かないところで、困難な状況に置かれている方々にとって、安全に住むことのできる家を提供するという皆様の活動は、真のニーズに応える活動であり、普段自分ができていないことでもあります。

シェルターを利用されている方それぞれの状況に合わせた支援を提供できるのは、スタッフ皆さんのこれまでの

豊かな経験に裏打ちされた専門性や技術にも支えられてのことだと思います。LGBT当事者の一人としては、本当に困ったときに助けてといえる場所があることが、日常を暮らす上での大きな安心感につながっているとも感じます。

5年続けられてきたこと、本当にありがとうございます。皆様の活動のご発展を願いつつも、LGBTの人々のシェルターが必要のない社会作りにむけ、医師として、当事者として、皆様の活動に力をいただきながら、私も力を尽くしたいと思います。



一般社団法人にじいろドクターズ 理事
川崎協同病院 総合診療科 科長
吉田絵理子

生活保護のケースワーカーをしています。私と「ハウジングファーストを考える会・東京」のみなさんとのつながりは、支援ハウス開設前の2017年に遡ります。

ホームレス支援の現場において、セクシャルマイノリティのみなさんが利用しやすい一時施設がないことは私もよくわかっていましたが、残念ながら今でもそのような公的施設はありません。また、当時も今も、生活保護や生活困窮者自立支援制度でLGBT当事者のみなさんへ何か特別な支援があるわけではありません。

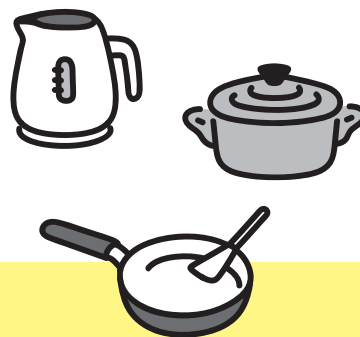
公的制度では対応できず、しかし現場には確実にあるニーズに対して、利用者の立場に立たれて支援ハウスを開設されたこと、そしてそれがハウジングファーストの理念で進められていることがとても重要で画期的なことだと感じています（一方で公的財源ではなく、クラウドファンディングという市民の善意のお金とスタッフの熱意で成り立っていることに一行政職員として恥ずかしい思いもあります）。

ともするとこれまで誰にも相談できなかったことや誰かに相談しても聞いてもらえなかった可能性があるLGBT当事者にとって、共に歩んでくれるみなさんの存在はどれほど大きいことでしょうか。

そして「ハウジングファーストを考える会・東京」では、色々な立場の多様なみなさんが連携されていることも大変心強く感じます。必要とされる声に真摯に対応しているみなさんに感謝と敬意、そして微力ながらの連帯の意思をお伝えします。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

東京都板橋区板橋福祉事務所
横田敏



スタッフメッセージ

本プロジェクトは、「LGBTと貧困・ハウジングファースト」をテーマにしたシンポジウムで出会った仲間たちと計画を立て、クラウドファンディングを通して皆様からの寄付を得て動き出しました。

2室の通称“支援ハウス”の運用を通して経験したことは、私たちの想像を超えた生きづらさや難しさとの出会いでもありました。

利用者とは連携団体や専門家からの紹介で繋がる場合もあれば、他領域で活動する専門性の高いNGOからの紹介という場合もありました。この東京都中野区での実践を通して出会ったアンメットニーズは、この日本社会の脆弱さ、課題をも私たちに知らせてくれている。

生島嗣

LGBTという言葉がやっと思慣れた言葉になってきたように思います。

それでもLGBTの「生きづらさ」は生活のそここにまだまだあるとも感じています。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」の活動に関わって思うのは、「生きづらさ」は絡み合っているということです。

住まいを失う原因は単純ではなく複数の要因があります。その要因には直接的ではないものも含めてLGBT特有の「生きづらさ」が見えてきます。

少しでも「生きづらさ」が解消されるのを祈りつつ、この活動に携わっていかうと思っています。

石井竜太郎

これまで、LGBTの当事者でもある中野区の区議会議員や、東京精神保健福祉士協会の司法ソーシャルワーカーとして、LGBTの当事者やその支援者からの相談を受けての支援をしてきました。

その中でも、支援を受けることに対するためらいや、支援を受け始めてからも躊躇する様子を目にすることがままありました。そして、LGBT支援ハウスとのかかわりができてから、せっかつながった支援に対して「こんなにうまくいくはずがない」と不安に思ってしまう、行方をくらましてしまう人がいるという現実を突きつけられました。

誰もが安心できる住まいを得て、必要に応じて適切な情報が得られたり、支援を受けたりすることができる。それが当たり前となっていない現状に対して、制度を変えることに加えて、人の心を変えていくことの必要性を痛感しています。

LGBT当事者もそうでない人も、生活困窮状態にある人もそうでない人も、健康で文化的な住まいのある暮らしを気兼ねなく享受できる社会づくりを、これからも進める一翼を担っていきたいと思っています。

石坂わたる

かれこれ20数年に渡りLGBTQ+やその周辺の方々からの相談を受けてきました。

相談の中では様々な理由で住まいの確保が難しいという内容も多くありました。

性自認や性的指向で家族の理解を得られずに実家を飛び出した。同性パートナーからのDVで一緒に暮らすことができなくなった。職場でハラスメントにあい仕事を辞め生活困窮に陥るなど、理由は様々です。

そんな時に安心して屋根のある生活ができ、その先の人生設計を考えていける支援ができればと考えてきました。

「ハウジングファースト」のシェルターは1室から始まり、残念ながら住まいを求めている当事者全てを受け入れることができるわけではなく、また運営や支援に携わるマンパワーについてもキャパシティが足りないのが現状でもあります。

それでも「ハウジングファースト」の支援を通じて関わった人たちが、適切な社会資源につながっていけるために、LGBTQ+の人たちが安心して利用できるシェルターを継続していくことに尽力していきたいと思います。

大江千束

当事者としての活動はしてなかった自分にとって、「ハウジングファースト」は初めての活動場所だった。

中高時代にスカートの制服が嫌すぎて登校するとすぐに体操服に着替えていたが、それを教師がとがめることがなかった。それで、私は今まで生き延びることが出来た。

「ハウジングファースト」のシェルターを利用される方は、教師にとがめられて苦しくなった私であったかもしれないという思いで、いつも活動している。

稲吉久乃

「LGBTハウジングファースト」が始まってから5年が経った。はじめは、ちょっとお手伝いする程度だったのが、気づいたら、「ハウジングファースト」のことで動いたり、考えたりするのが日常になっていた。

深く活動にかかわるようになって、「福祉国家」や「社会保障」の枠の外側で、制度の対象にならなかったり、サービスを使いにくかったりする人たちが暮らしている現実を見てきた。

人が「生活に困窮する」ことの裏側には、病気、障害、DV、性暴力、虐待、難民、差別、偏見など、さまざまな理由が絡み合っている。

ちょっとしたパズルの組み合わせで、いつか自分自身が同じ立場に置かれるかもしれない今の時代、人とのつながりを含めたセーフティネットがあらためて大切だと実感している。

金井聡



わたしは普段、LGBTユースの居場所づくりに携わっています。

LGBTユースのなかには、規範的ではない性のあり方を理由に保護者との関係が悪化し、家にいたくない／いられないという方もいます。

しかし、既存の一時避難施設はたいていジェンダーによって二分されており、LGBTの方にとっては安心して利用できる状態ではありません。安心できない環境に留まることでメンタルヘルスの不調を来す場合もあります。

「ハウジングファースト」の活動に関わり始めてからは、ジェンダーやセクシュアリティの在り方だけでなく、メンタルヘルスや障害の有無、国籍の問題など、様々な要素が複合的に重なり合うことで生活困窮に陥っている方がいるということを実感をもって感じるようになりました。公的な社会資源が限られており、ボランティアな資源に頼らざるを得ない状況があります。

ぜひ、より多くの方にこの問題について知っていただき、一緒に考えていく仲間になっていただけたら嬉しいです。

古堂達也

私は、住まいが大事だと思い、最初の就職先は、住宅供給をする組織に入りました。家族に介護が必要になった時には、家族が入居できるようにグループホームの立ち上げに関わりました。「LGBTフレンドリーなシェアハウス」の企画運営にも関わっています。

生活の基となる住まいをまず提供していくのがハウジングファーストの考えですが、それは命や尊厳を守っていく取り組みです。

「LGBTハウジングファーストを考える会・東京」では、LGBT当事者にとって、安心して過ごせる住まいや居場所が作られるように活動を行っていますが、まだまだ充分とは言えない状況です。

この冊子が、そのことを少しでも多くの人に知ってもらい、共に力を合わせていけるように、役に立つことを願っています。

前田邦博

以前から罪に問われた障害のある人の更生支援に関わっており、矯正施設を出た人のその後の住む場所を探すことが難しく、安心できる住まいを確保できないことが、社会復帰の難しさにもつながっていることを実感していた。

個室に入居できた後に、どんなサポートがあると生活を立て直すことができるのか、住まいの支援を自分でも体験してみたいと思っていた時に「ハウジングファースト(HF)」と出会った。

どんな事情を抱えた方々が入居してくるのか、よく把握しないまま活動を始めて、6カ月が経った。

安心できる住まいがなくて困っている利用者の中には、難民申請中の外国人がいることも新鮮だった。活動する中で、利用する方の国籍に関わらず、孤立しないように気にかけてくれ、ちょっと手伝ってくれる人とのつながりが、その人の支えになることもわかってきた。

地域の支援者につなげて、その後の生活に役に立つようなネットワークを提供することの必要性を実感している。

閉じこもりがちな利用者と、たまには外に出てピクニックに行ったり、一緒に楽しむ時間を、また皆で持てたらよいと思っている。

渡辺ひかる



寄附をする

ご寄附の方法について

クレジットカードでの毎月の寄附・一回の寄附、銀行振込が可能です。

銀行振込で寄附をする

ゆうちょ銀行専用

ゆうちょ銀行

記号:10330

口座:87996301

名義:エルジービーテーハウジングファーストラ

カンガエルカイトウキョウ

ゆうちょ銀行以外

ゆうちょ銀行 〇三八支店

普通口座:8799630

名義:エルジービーテーハウジングファーストラ

カンガエルカイトウキョウ

毎月寄附をする



クレジットカードで毎月一定額をご寄附いただけます。(Syncableのページに飛びます)

<https://syncable.biz/associate/lgbthf/donate?recurring=true>

今回だけ寄附をする



クレジットカードでご寄附いただけます。(Syncableのページに飛びます)

<https://syncable.biz/associate/lgbthf/donate?recurring=false>



LGBTハウジングファーストを考える会・東京

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

東京ボランティア・市民活動センター メールボックスNo.35

<https://lgbthf.tokyo>

info@lgbthf.tokyo

